

いの流水俳壇

松尾 満津於選

「当季雑詠」

万緑を断つ一瀑の白さかな

間 浩太

(評)夏の瀑布の遠景である、白布の如く巖壁に懸るものから、山谷をゆるがせて落ちるものまで、大小いろいろの瀧がある。日本で有名な瀧は日光の華厳瀧、和歌山県的那智瀧、富士の白糸の瀧などあるが、それほど有名でなくてもいたるところで、そんな情景は見受けられる。満緑の中を落ちる一条の白い瀧、それは夏の季節に眼から感じとる真夏だからの涼しさであろう。原句は「満緑を裁つ一瀑の濃き白さ」であったが、勝手に添削しました御容赦下さい。

老鷺の窓は槍岳槍見の湯

友草 水月

(評)夏登山時の展望構図であろう、槍ヶ岳は長野県と岐阜県の境にそびえる飛騨山脈の高峯、眼下には数箇所温泉があ

り、湯治客も多い。春から夏に入ると鷺も何となく、声にはずみがなくなる。この頃のことを指して老鷺というが、「鷺老を鳴く」ともいう「うぐひすや木曾の谷間に老をなく」という俳人虚子の名句がある。

検札に汗の切符を探し出す

岡本とも子

(評)作者は可成りの高齢者であるが、年令に関係なく優れたセンスをもった俳人であると思っているが、この句を見る限りでは、矢張り歳惚けも多少は存在したのであろう、自覚のないままに忘れる事がある。検札の切符もその一つ、やっと探し当てて取り出す汗の切符。

おもてなしできませぬがと麦湯かな

伊藤 たみ

(評)情景をそのまま十七文字にまとめた句である。鑑賞は十人十色のもの、俳句のような短文ではその差が多岐にわたる。自分を正面に置くと句の品を損う場合もあるので、客観的な実景を描写すること、自分自身を表面に出さないのが無難のように思えるのだが……。

間につまずく手探りの夏の花 秋田 律子

外出に覚悟の要りぬ炎天日 竹崎 光子

八雲も見ゆ神話の里の夏祭り 中野 好子

短かさを激しく生きて蟬時雨 大川 節弥

秋の蝶葉裏の闇を抱き眠る 刈谷 志津

ひぐらしやまだ草とりに余念なき 川村 博子

秋立つや足のマニキュア空の色 井上 郁子

終戦日知らぬ若者茶髪かな 森本二美子

端居して飼い主も老い犬も老い 津田 久美

打上げの煙でかすむ遠花火 森岡 照月

盆の夜は逝きにし夫と語りあかさ 筒井 文

風通る千し場えらびし鹿の子百合 弘瀬うき子

鳴き洪る一匹も居り蟬時雨 片岡 包女

炎天下歩む人なく静かなり 川村 愛

ゆるやかに背^{せみ}の動く青田かな 松尾満津於

次 題 「当季雑詠」

締め切り 毎月第2月曜日まで

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

867-2133

お知らせ
法テラスの
業務について

「法テラス」は全国どこからでも法的トラブルを解決するための情報やサービスの提供を受けることのできる社会を目指して制定された「総合法律支援法」により設立された法人です。

正式名称は「日本司法支援センター」ですが、「法で社会を明るく照らしたい」「皆様がくつろげる陽当たりのよいテラスのような場所にしたい」という思いから愛称を「法テラス」と名付けました。
法的な困りごととは法テラスへお電話ください。

0570-078374

(おなやみなし)

※固定電話であれば、全国どこからでも3分8.5円で通話することが出来ます。

